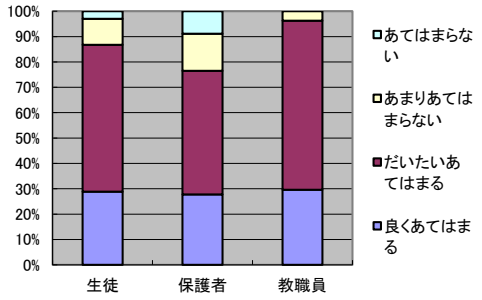
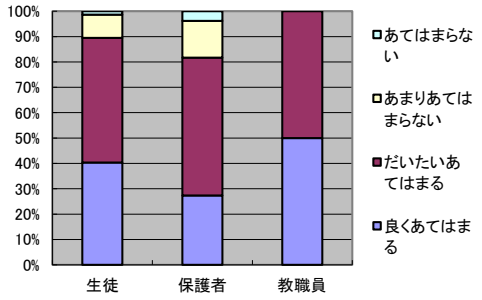
令和4年度12月実施：教育活動に関するアンケート：生徒・保護者・教職員比較

1（1） 川越町教育基本方針を意識して取り組んでいる。



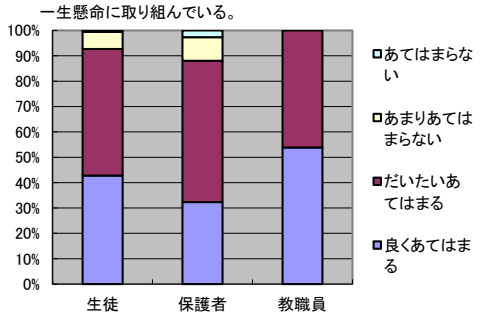
生徒は1年生が一番高い割合になっている。2年生が一番低く、それは昨年の1年生の時点で低いので、数字だけ見ると学年で差がある。なぜ、学年に差があるのか原因はわかりかねるが、普段の取り組み・年数によって変わるものと思われる。
保護者の数値が低いのは学校の基本方針を目にする機会が教員・生徒に比べ低いことによるものと考えれられる。
教職員については、全職員が肯定的な回答であることから、教師の想いが、粘り強い指導を継続することで生徒たちに伝わってきていると考えられる。

1(2) 学校では、学習や運動に積極的に取り組んでいる。



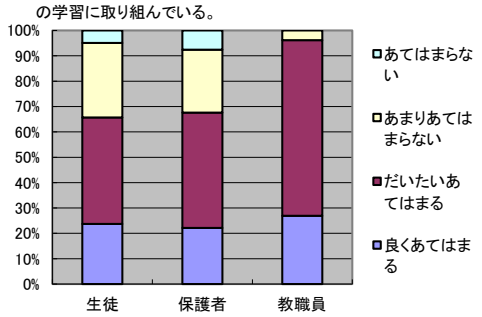
生徒の肯定的意見は昨年度と変わらず約90パーセントで、積極的に学習や運動に取り組んでいることがわかる。三者を比較すると保護者の評価が最も低い傾向にあるが、それでも肯定的意見が約80パーセントとなっている。また、教職員の「良くあてはまる」「だいたいあてはまる」が全体を占め、取り組みに対する姿勢に満足を示している。さらに、定期テストや実力テスト等の結果からみえてくる課題や他のアンケート項目での取り組みを参考にしながら、積極的に生徒に向き合っていく姿勢を大切にしたい。また、教師間での気づきや発見を共有し、生徒にとって学校生活が充実したものになるようにしていきたい。

1(3) 学校の「きまり」を守り、仲間と協力しながら何事にも一生懸命に取り組んでいる。



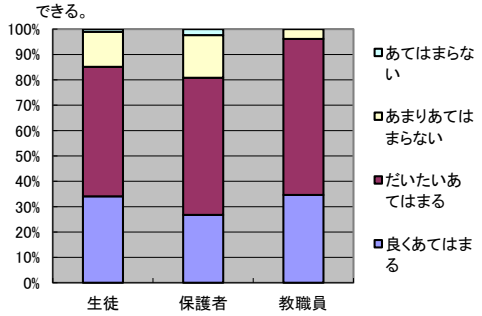
(2)「やる気」と(3)「ほん気」の「良くあてはまる」「だいたいあてはまる」の肯定的意見が生徒においては約90パーセントと同じであることから、生徒にとっての学校生活は充実していると考えられる。コロナによって縮小傾向であった行事への取り組みも、学校、保護者の連携と協力によって生徒の努力の成果が出せる機会が徐々に増え、その結果も学校を明るく活気づける要因となっている。今後は学校での学習だけでなく(4)「こん気」の家庭学習への取り組みを大切にした、粘り強さのある生徒の育成を保護者とともにすすめていきたい。

1(4) 家庭でも、宿題をはじめとした授業の予習や復習などの学習に取り組んでいる。



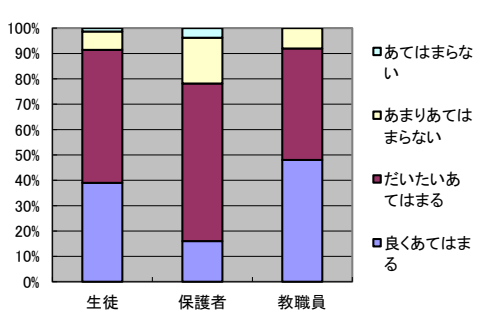
生徒の約65%が肯定的な回答をしているが、このグラフでは見えないが、学年が上がるにつれて、肯定的に取り組んでいる傾向がある。このため、1年生から、家庭学習の取り組みを価値づけるよう、生徒に引き続き働きかけをしていくことが重要である。
また、教職員の約95%が肯定的な回答をしており、教職員の生徒への意識との乖離がみられるため、その差を意識した指導が必要である。また、保護者についても約65%と低いため、通信や三者懇談会などで、家庭学習の取り組みの周知を行ったり、保護者から意見を取り上げたりしていく必要がある。

1(5) 自ら進んであいさつができ、ていねいな言葉づかいができる。



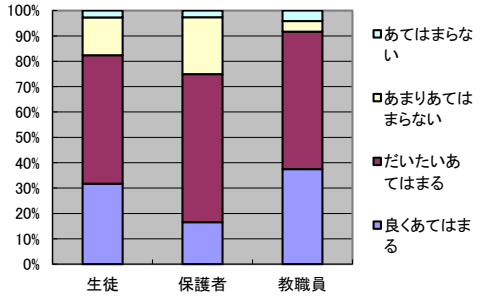
約85%の生徒が進んであいさつができ、ていねいな言葉づかいができると回答しており、生徒が進んで挨拶を行っているといえる。これは、生徒会、代議員によるあいさつ運動の成果と考える。保護者は、生徒、教職員と比べて約80%と低くなっているため、保護者の実感との差異を埋める努力をすべきである。また、保護者の方々にも学校の取り組みが伝わるよう、学校での日々の生活や部活動でのあいさつや言葉づかいの指導は継続していくことが重要である。また、家庭や学校外でのあるべき姿を伝え、声かけを行っていく必要性がある。

2(6) 授業は、ていねいで、わかりやすい。



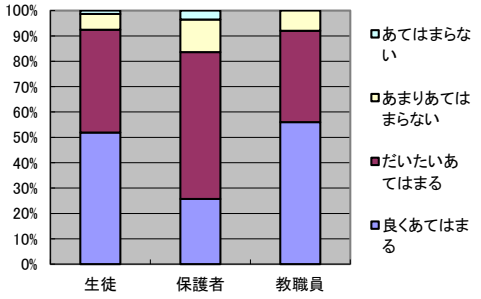
生徒の満足度は昨年度とほぼ変わらず90%を超えた。保護者は、78.2%と昨年度より、約2.8%満足度が高くなっている。この原因として、今年度から授業参観が再開したり、HPや学級通信をはじめ各種通信で学校の取り組みを積極的に伝えていることが要因であると考える。保護者が各行事を参観することで生徒の実情を知っていただいたことも理由の一つであると考える。今後、学校の取り組みを伝え、生徒、保護者、教職員のギャップを埋めるべく、より一層、日々の研鑽に励む必要がある。

2(7) TT(ティームティーチング：複数の先生で行う授業形態)による授業の方が、先生と関わり合える機会が多い。



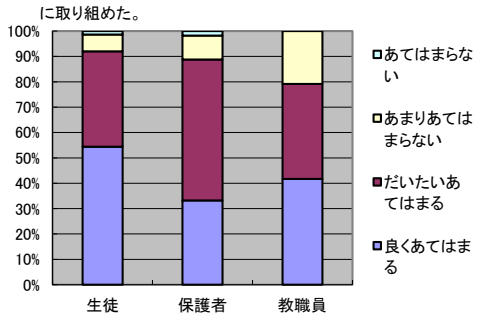
生徒の満足度は昨年度と同様に80%を超える値となっている。また、保護者の満足度は昨年度から5.4%高くなる結果となった。今年度の少人数やTTが充実したものとなっているとともに、授業参観で少人数やTTの授業の様子を見ていただいたことも要因の一つであると考える。その他にもさらに生徒のつまづきや基礎基本の定着を進めるためにも少人数やTTでの工夫した授業改善が必要である。

2(8) 授業では、班活動などを通して、仲間との話し合いがよく行われている。



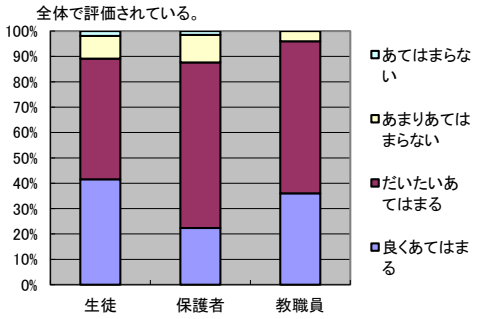
生徒の満足度は90%以上となっている。生徒は班活動や仲間との話し合いにより授業が行われていると実感している。普段の学校生活の中から班活動を大切にしていることが要因の一つであると考える。また、教職員の数値は昨年度より約5%上昇した。生徒の満足度が高い要因として、教職員一人ひとりが「対話的で主体的な学び」等の研修を深め、今ある姿と照らし合わせ、実践を行った結果であると感じる。教職員がお互いに授業を見せ合ったりすることで、良い所や改善点を明確にし、授業づくりに生かしていく必要がある。

2(9) 自然教室・職場体験・修学旅行などの学習に意欲的に取り組めた。



生徒は、92.%と高い割合を示しているため、新型コロナウイルスの影響がある中、行事に意欲的に取り組んでいるといえる。特に2年生生徒の意欲的に取り組めていない生徒の割合が高いのは、新型コロナウイルス感染症のために、職場体験を実施できていない現状が理由であると考えられる。職場体験学習の代わりに、2月末からゲストティーチャーを迎え、キャリア学習をしていく予定である。このため、意欲的な取り組みとなるように、新型コロナ対策を行いながら、行事を精選して行い、その生徒の取り組みの成果を評価していく必要があると考える。

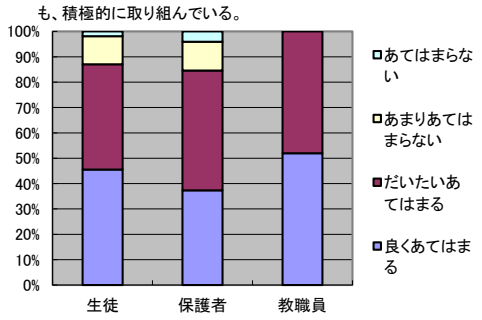
2(10) 学校の成績は、テストの点数だけでなく、学習活動全体で評価されている。



教職員の満足度が96%となった。昨年度から新学習指導要領が施行され、研修を積んできており、それにより意識が改善されてきているようである。しかし、生徒は90%近くの満足度であり、保護者の結果は昨年度から約3.6%上がっていることから、シラバスや評価の方法を生徒・保護者に周知し、評価規準・基準や授業の中での評価の観点を明確に示していることも要因の一つであると考える。

また、教職員として、評価を通知表の結果だけにとどまらず、定期的に学習活動を評価していくことで、授業の改善を図っていく必要がある。テストだけでなく、日々の学習活動を評価し、成績に反映するよう努めたい。

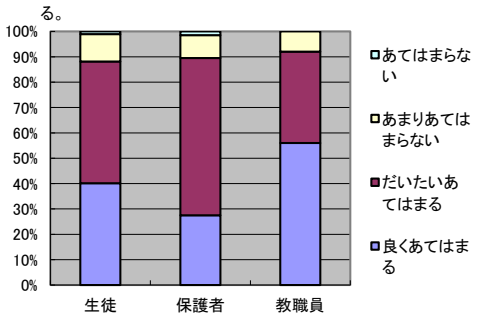
3(11) 学校行事や学級活動など、教科の学習以外の活動も、積極的に取り組んでいる。



満足度を比較すると、生徒と教職員に関しては肯定的な意見が90%前後と、生徒が主体となった活動が展開されている様子が伺える。しかし保護者の満足度は二者を下回る結果となり、特に「良くあてはまる」という回答は二者を下回るため、学校側の働きかけが必要だと考える。

今年度は2年ぶりに学校行事が縮小されながらも行われることが増えてきた。直接学校に来校して生徒の活動の様子を参観する機会は依然少ないものの参加してもらえるようになってきた。また、全ての学級で学級通信が発行され、通信を通じて、生徒の活動の様子が活発に発信された。発信力という点では参観には及ばないかもしれないが、通信やホームページなどの手法で保護者に生徒の積極的な活動の様子を知らせていき、否定的な回答の割合を減らしていきたい。

3(12) みんなが協力できるまとまりのある学級となっている。

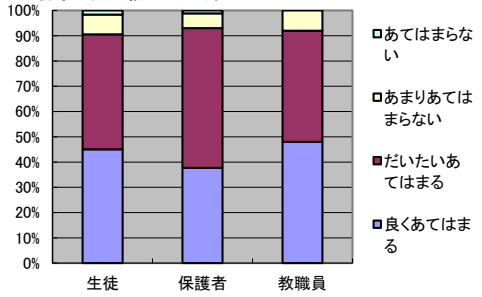


三者ともに満足度は高く、90%近い数値となっている。そのため、現在取り組んでいる活動を継続していくことが、生徒たちの意欲や学級づくりに繋がっていくと考える。

その一方で、「あてはまらない」と答える三者がいることも受け止めなくてはならず、そのように感じられる原因をまずは教師が見直していく必要がある。取組自体が良くないのか、取組への理解がされていないのかによって、取るべき方策は変わってくる。いずれにせよ、生徒や保護者への理解や実感、教師の意識は、我々がアンテナ高く教育活動に対して取り組んでいかなくてはいけない。

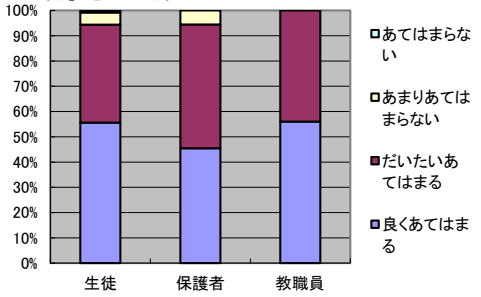
多くの生徒がクラスに対して前向きな思いを持っていることが理解できたので、その思いを上手く活用し、学級づくりに対して、大胆かつ異次元な取組を思案していけるよう、検討していきたい。

3(13) 先生たちは、教育相談等を通じて、自分の悩み等に親身になって接してくれる。



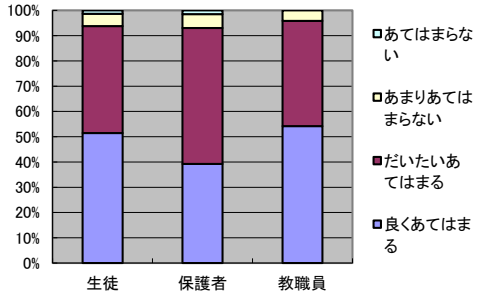
肯定的回答をしている生徒、保護者共に90%以上という結果は、この数年とほぼ同じであった。
ただ、前年度は「あてはまらない」と答えた生徒が1年生2人、3年生2人であったが、今年度は1年生2人、2年生4人と増えており、学校全体でわずかだが増加傾向にある。また、「あまりあてはまらない」と答えた生徒も全体で29人おり、前年度より増加している。このような傾向を見逃すことなく、来年度以降も、教育相談の機会をしっかり確保していく。もちろん、教育相談の機会だけでなく、日頃からデイリーライフや放課後等の時間も使い、何か問題が起こってからではなく、日常的に多くの生徒と関わる機会を設ける意識をもっていかなければならない。必要に応じて保護者とも情報共有を行い、連携していく。

4(14) 周りの人や友達、自分にはそれぞれ「良いところがある」と思っている。



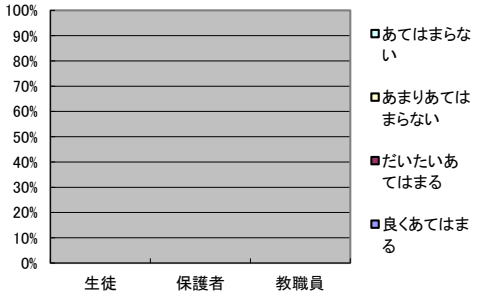
前年度、今年度ともに生徒・保護者の肯定的な回答が90%半ばとなっている。ただし、「あてはまらない」と回答をしている生徒が全学年に1人ずついる。教職員の回答は、否定的な回答が令和4年度は0%となっており、「周りの人や友達、自分に良いところがある」と生徒が思えるような教育を推し進めている。教師自身が互いの良いところを認め合うという意識のもと、普段の生徒との関わり、授業、道徳教育に取り組んでいると考える。
一昨年度からの学校全体での学級通信・学年通信等を活用した「見つめる」「語る」「つながる」取組が、自他の思いを共有し、他者をより知ることができる機会につながっていると考える。日常の学校生活から仲間づくりや人権学習に対する共通理解を進め、この取組を学校全体で進めていけるよう研修計画を立て取組を進めたい。

4(15) 道徳の時間や人権学習の授業に真剣に取り組めている。



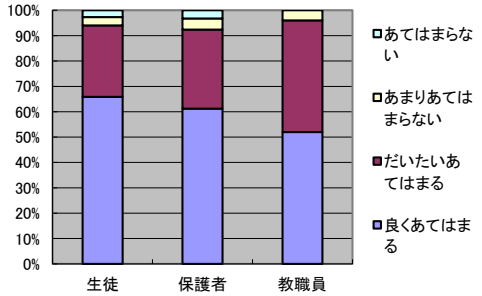
令和元年度から4年度において生徒や保護者の90%以上が道徳や人権学習に真剣に取り組めていると回答している。教職員も90%以上が取り組めていると回答している。学校全体として、計画的に人権学習と道徳の授業数・内容等の見通しをもって取り組むことができたと考える。今後も、道徳・人権学習ともに「生徒にどのような力をつけたいのか」を明確にした上で、指導計画を余裕をもって検討、生徒が自分のこととして向き合って真剣に考えられる教材の工夫と発問の工夫をより一層進めていく。

5(16) 上級生や下級生と楽しく部活動に参加している。(3年生は、参加していた。)



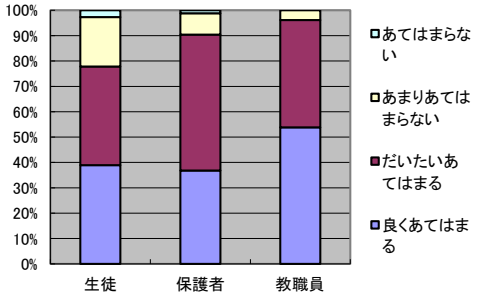
今年度この部分のアンケートは実施しませんでした。

5(17) 部活動に積極的に取り組めている。(3年生は、取り組めていた。)

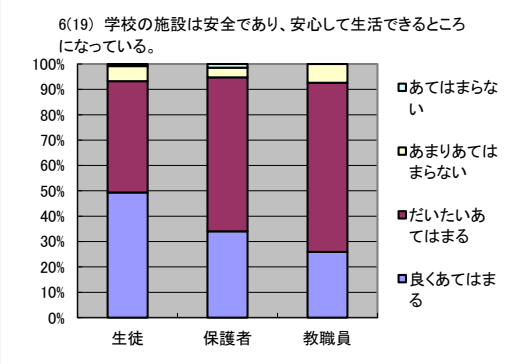


昨年度同様、生徒・保護者は高い数値で概ね満足感・達成感を持っている。「達成感や成就感をもたせる・学年の枠を越え、人間関係の形成・社会性の育成」の視点で顧問が継続的に指導した結果であるともいえる。また、「部活動ガイドライン」が定着し、決められた時間の中で、部活動を楽しみ、積極的に参加できるよう、教師が顧問として、内容の工夫や場の設定、支援の在り方を考えてきた成果であると考える。ただ、生徒の6～8%が積極的に参加できていないことがあり、そのことにも目を向けていく必要がある。

6(18) 学校の様子を保護者に話している。また、配付物はきちんと見せている。

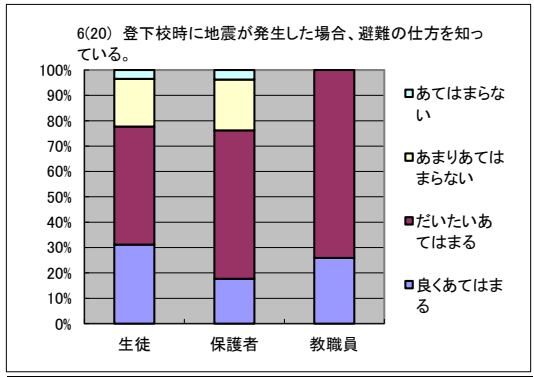


生徒79%、保護者88%、教職員96%。今年度は、体育祭や文化祭などの大きな行事で、数年ぶりに全校一斉での保護者参観可能にした。また、公開授業を行ったり、日頃から教職員・保護者が互いに電話などで連絡を取り合い、学校や家庭での生徒の様子を共有したりしている。加えて、学年・学級通信、進路通信、生徒指導だよりの配付が保護者の高い数値につながっていると考えられる。さらには、ホームページも頻繁に更新することで、アクセス数も増加しており、保護者をはじめ地域の方からも学校の様子・教育活動を知ってもらえているのも大きな要因だと考える。
一方、学校の様子を保護者に話さない、また配布物を渡していない生徒が20%いる。これは、保護者の学校に対する不信感にも繋がるので改善の必要がある。



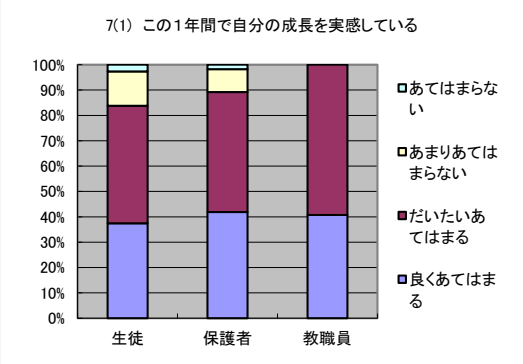
昨年との比較では、生徒±0ポイント、教職員＋20ポイントとなっている。この数値から生徒は安心感をもって学校生活を送れていることが伺える。教職員は、校舎の老朽化による不安感があったが、危険箇所などについては随時報告・修理し対応しているため安心感が増えていると考える。しかし、校舎の老朽化等が進み、教室や廊下での雨漏りやトイレの水詰まり、防火扉に不具合が生じたりするなど、指導や自助努力の範囲を越えているという側面もある。新校舎設立に向けて話が進んでいるが、現校舎で生徒を預かっている以上、安全安心に過ごせる学校を恒久的に目指していくため、現状の改善に向けて教育委員会に今後も上申し続けていく必要がある。

保護者について、昨年と同じ推移を保っている。今後もコロナ感染症対策などを明確に掲示しながら、学校運営を進めていく必要がある。

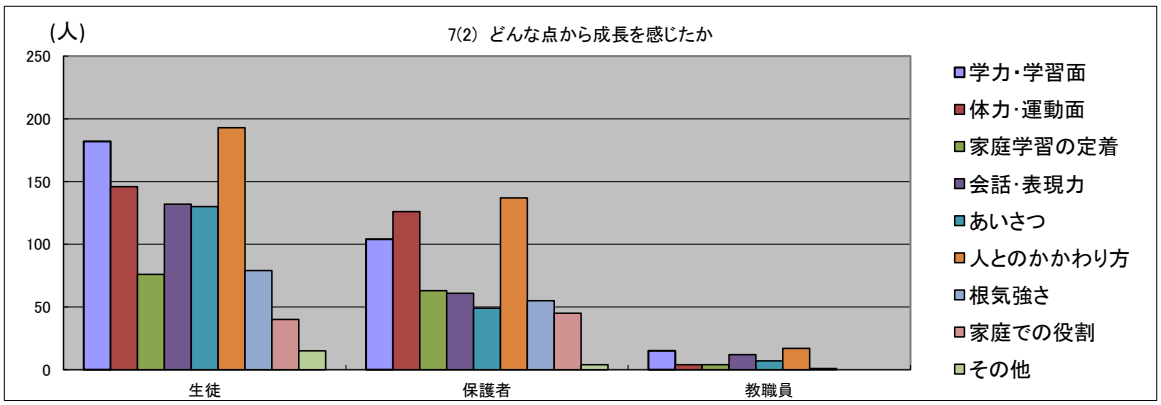


生徒・保護者ともに昨年と比較し5ポイント程度増加している。これは、今年度2回避難訓練を実施できたことや防災訓練などの時に、避難経路を確認したことが要因に挙げられる。 しかし、この項目に対して、20%の生徒が避難経路をわかっていないという事実は重く受け止める必要がある。命が関わってくるものなので限りなく100%に近づけなければならない。

教職員は「防災や事故防止、避難訓練等の対応が適切」という問いに対し、100%という結果だった。生徒の結果を見たときに、この数値は高い。今年度は校舎からの避難経路などの見直しがあったので、適切に対応しているという認識があるが、認識を改め、くり返し生徒に伝える必要がある。また、年度初めの地区別集会で、登下校時の避難経路についての確認が重要である。



今年度は設問に対して、「良くあてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した生徒は85%、保護者は90%、教職員の100%が、と肯定的な回答となっている。これは成長を実感できる取組が進められていると考えられる。しかし、学年別で生徒の様子を見ると、1年生が89%、2年生が80%、3年生が82%となっている。引き続き各学年の系統的な人権学習や日常の仲間づくり(クラス・トーキング)を通して、生徒が成長した姿を実感できるような取組を学校全体で系統的に進める必要がある。



「人とのかかわり方」にの設問に対して、1年生では86名、2年生では45名、3年生では62名が回答し、1年生ではこの項目が一番大きく表れている。2年生、3年生では、「学力・学習面」が一番大きく表れている。1年生では生徒の半数以上が「人とのかかわり方」に回答しており、毎日の振り返りを言葉にして自分を見つめる活動を進め、クラストーキングを重ねてきた結果であると考える。本校の人権教育でめざしている「仲間とのつながり」について、生徒も保護者も教職員も成長を感じていることが示されている。それに伴って、「学力・学習面」「体力・運動面」「会話・表現力」「あいさつ」に成長を感じている生徒の回答数は多い。これは、「人とのかかわり方」を基にして、「学力・学習面」「会話・表現力」も成長しており、「主体的・対話的な深い学び」が徐々に定着してきた成果と考える。これらをベースに学力の向上を図っていきたい。一層、クラストーキングを多くの学年で取り入れていきたい。

ここ数年の課題に挙げられるのは、「家庭学習の定着」「根気強さ」である。学習課題の与え方を工夫し、何をどうしたらよいのか方法を含めて提示し、保護者にも知らせていく必要があると考える。あわせて、生徒が自ら進んで学びたいという意欲を湧き立てるような授業づくりをさらに進めていきたい。